

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

| | | | | | | | |
|-----------|---|--|-----|----|------|---|-----|
| 指定期間 | ふりがな | かんさいそうかこうとうがっこう | | | | ②所在都道府県 | 大阪府 |
| 27～31 | ①学校名 | 関西創価高等学校 | | | | | |
| ③対象学科名 | ④対象とする生徒数 | | | | | ⑤学校全体の規模 | |
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 計 | 普通科 生徒数 1075名 (2014年度) 同キャンパスに中学校を併設 | |
| 普通科 | 359 | 357 | 359 | | 1075 | | |
| ⑥研究開発構想名 | TRY 人(じん)の郷・交野から 平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム | | | | | | |
| ⑦研究開発の概要 | <u>Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する。</u> | | | | | | |
| ⑧研究開発の内容等 | ⑧-1全体 | <p>(1) 目的・目標</p> <p>1600年前に日本に技術を伝えた渡来人が住み着いたとされる交野。21世紀はこの交野より世界へ飛び立ち、<u>地球的課題の解決に果敢に挑み、世界の平和に貢献するグローバルリーダーを育成することを目的とする。</u></p> <p>SGHAとして2014年度に取り組んだプログラムをさらに発展させ、創価大学・アメリカ創価大学・オタゴ大学等の高大連携を強力に推進し、UNDP等国際機関とも提携して、地球の今を学び、体験し、問題解決へ発信する新教育プログラムを作り上げる。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>最近5年間における海外大学進学者数の累計は53名であり、本校から創価大学に進学した者の40%は留学等海外経験を行うなど意識は高いが、さらなる語学力の向上や主体的な学びの姿勢を育む授業改革が必要であり、高大連携してのActive Learning、ICT教育に取り組むことで大きく改善が期待できる。</p> <p>生徒自ら地球的課題に挑み解決しようとする「使命感」は、第一に世界の現状を知り、苦しみを分かち合う「共感力」の向上の中で培われるものであると信じる。</p> <p><u>世界が課題とする「環境・開発・人権・平和」の4分野について、大学、国際機関、企業と提携し、国連が具体的に提起している諸問題を探究し、生徒たちがチームとして新たな視点からその解決を目指すプロセスを確立することとする。</u></p> <p>そのため、教育の根幹たる授業において、友と協力し自ら学ぶ学習スタイルを確立することが今後のグローバルリーダー育成の取り組みの土台となるので、Active Learningを全教科にわたり積極的に導入するべきである。その基礎の上に、全員で取り組む探究型総合学習GRITでの「環境・開発・人権・平和」の4分野の学びはより進むものと確信する。さらに興味関心を抱く希望者には、高大連携プログラムとして、SP(SOKA Progress)クラスと呼ばれるグローバルイシューの基礎講座を実施。そこで学びを深めた生徒からさらに選抜して、国際機関と提携してのLC(Learning Cluster)プログラムを行う。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>専用WEBサイトでの発信とともに、他の指定校と連携しながら、SGH教育報告会を開催。またオープンキャンパスにおいて、内外に向けた取り組み成果の報告を行う。新たに開発した教材はデジタル化し、広く公開していく。</p> | | | | | |

| | |
|---|--|
| <p>⑧ -2 課 題 研 究</p> | <p>(1) 課題研究内容 グローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力の育成を図るため、「<u>環境・開発・人権・平和</u>」の4分野について国連が具体的に提起している諸問題を探究し、チームとして解決方法を目指すプロセスを確立する。 ※コアとなるグローバルイシューは、「ポスト2015 開発アジェンダ」の検討内容を中心として各チームがテーマを設定し探求する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>①<u>探究型総合学習 GRIT (Global Research and Inquiry Time)</u> ○土曜日に実施 ○全校生徒を対象 ○「環境・開発・人権・平和」の4分野について大学・国際機関・企業と提携し探究活動 ○大学院生を各クラスにTAとして配置 ○1年生「環境・開発」 2年生「人権・平和」 3年生では模擬国連と論文作成 ○GRIT 講演会 Global Citizenship Seminar を学期毎に開催 ○全員が EarthKAM を体験し、宇宙から地球を見つめる視点を育成 ○「天の川ホタル復活プロジェクト」で自然との共生の心を育む</p> <p>②<u>高大連携プログラム SP (SOKA Progress) Class</u> ○希望者を対象 ○グローバルリーダーの資質向上に資する連続講座 ○提携大学・国際機関から講師を招き実施する UP(University Partnership)Class ○2015年度から単位を付与 ○GRIT を推進し、LC へつなぐ</p> <p>③<u>国際機関と提携して行う先進的な特設プログラム LC (Learning Cluster)</u> ○2・3年生の希望者から最大32名(2015年度は20名を予定)を選抜 ○4名1チームで4分野からコアとなるテーマを設定 ○活動の全ては英語 ○創価大学と提携した東京・アジアフィールドワーク ○アメリカ創価大学と提携したカリフォルニア環境人権平和フィールドワーク ○UNDP と提携した開発フィールドワーク</p> <p>④<u>高大連携で授業改善 ― 友と協力し自ら学ぶ Active Learning を強力に展開</u> ○全ての課題研究の推進の土台として、主体性あふれる学びの姿勢を築く ○ICT 教育も同時に研究、推進 ○創価大学教育学部と提携し全教科で導入</p> <p>検証評価 学年・学期毎に SGH 委員会が作成したルーブリック評価を導入し、生徒の変容を評価するとともに、提携大学関係者を交えた評価委員会により行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p> |
| <p>⑧ -3 上 記 以 外</p> | <p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <p>①<u>留学生と地球的課題を語るプログラム Global Camp</u> ②<u>語学力向上の取り組みを強化</u> ○Critical Writing Center の設置 外国人講師が face to face で添削指導他</p> <p>③<u>世界に、社会に目を向ける NIE (Newspaper in Education)</u> ④<u>日本人としての identity を育成する Feel Japan Program</u> ○海外高校生徒との共同生活体験 ○留学生への古都案内 ○国語の授業、図書館、クラブでの「日本文化」の深化など</p> <p>検証評価 教養とリーダーとしての資質向上を期し、授業連携や読書教育をさらに進める。各種コンテストの参加数、生徒へのアンケートをもって検証評価を行う。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし。 (3) <u>グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の取組内容・実施方法</u> ①校長を長とする SGH 委員会等教職員体制の整備、強化 ②保護者の意識変革 ③専用 WEB サイトの開設 ④図書館に「環境・開発・平和・人権」「グローバルビジネス」専用書架の設置 ⑤SGH カリキュラムを含め研究開発計画に沿って実施</p> |
| <p>⑨その他 特記事項</p> | <p>提携校の創価大学は SGU であり、本校の研究開発を効果的に進めることができる。</p> |

| | | | |
|------|-----------------|------|-------|
| ふりがな | かんさいそうかこうとうがっこう | 指定期間 | 27～31 |
| 学校名 | 関西創価高等学校 | | |

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

| 1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム） | | 25年度 | 26年度 | 27年度 | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 目標値(31年度) |
|--|------------|--------|--------|------|------|------|------|------|-----------|
| 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数 | | | | | | | | | |
| a | SGH対象生徒: | | | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 750人 |
| | SGH対象生徒以外: | 200人 | 250人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 目標設定の考え方: 現状でも清掃活動などに参加する生徒は多い。GRITやLCを通して、貢献活動を地域や社会に対して拡大し、積極的に行う生徒を増加させる。また、自己研鑽活動に取り組む生徒を合わせて、全校生徒の3分の2を目指す。 | | | | | | | | | |
| 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数 | | | | | | | | | |
| b | SGH対象生徒: | | | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 100人 |
| | SGH対象生徒以外: | 15人 | 20人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 目標設定の考え方: グローバルな視点を学ぶことにより、自らの目で海外に触れることを望み、長期休暇を利用して研修に行く生徒数が、全校生徒の約1割となるように目指す。 | | | | | | | | | |
| 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合 | | | | | | | | | |
| c | SGH対象生徒: | | | % | % | % | % | % | 80% |
| | SGH対象生徒以外: | 31.90% | 33.40% | % | % | % | % | % | % |
| 目標設定の考え方: 現状でも留学や国際的な活躍への意識は高い。グローバルリーダーとして活躍したいとの使命感を育む教育を行うことにより、その割合が増加すると考えられる。OBから留学体験を聞く機会なども増やし、世界をより身近に感じられるようにする。(ベネッセスタディサポートなどを利用して割合を測る) | | | | | | | | | |
| 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数 | | | | | | | | | |
| d | SGH対象生徒: | | | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 50人 |
| | SGH対象生徒以外: | 5人 | 6人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 目標設定の考え方: 全校でGRITやFJPなどに取り組むことにより、深い考察を伴った発表を行えるようになると想定する。発表の場となる大会を数多く示して挑戦させ、結果を残していく。 | | | | | | | | | |
| 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合 | | | | | | | | | |
| e | SGH対象生徒: | | | % | % | % | % | % | 80% |
| | SGH対象生徒以外: | 30% | 35% | % | % | % | % | % | % |
| 目標設定の考え方: 最大限、生徒の英語技能の発達を目指す教育を行う。その効果は、3年生が全員受験するTOEICや英検の結果をもって測定する。TOEICのための講座を継続するとともに、英検を受けやすい環境を整え、3年生の80%以上がB1～B2レベルを獲得し、英語を駆使した高度な学習ができるようにしていく。そのための教員研修も行う。 | | | | | | | | | |
| 留学生とのグローバルキャンプ参加者数の増加 | | | | | | | | | |
| f | SGH対象生徒: | | | 名 | 名 | 名 | 名 | 名 | 350名 |
| | SGH対象生徒以外: | | 200名 | | | | | | |
| 目標設定の考え方: 1年次の9月に希望者で実施するグローバルキャンプは、校内で留学生と触れ合え、英語の学習はもとより異文化体験ができるという本校ならではのプログラムである。その魅力を生徒にアピールし、参加者数の増加を目指す。日常的に英語などの刺激を与えることにより、実際に留学生と話してみようと思う生徒が、学年全員(350名)を占めるようにしたい。 | | | | | | | | | |
| グローバルな活動のできる研究会・同好会への参加人数 | | | | | | | | | |
| g | SGH対象生徒: | | | 名 | 名 | 名 | 名 | 名 | 250名 |
| | SGH対象生徒以外: | | 130名 | | | | | | |
| 目標設定の考え方: 英語以外の言語を学び、他国の文化や情勢を学ぶ研究会・同好会が本校には多数存在する。世界に目を向けた授業を行うことにより、そういった研究会・同好会の参加者数が全校生徒の約4分の1となるよう目指す。 | | | | | | | | | |

| 1' 指定4年目以降に検証する成果目標 | | | | | | | | |
|---|------------|------|------|------|------|------|------|-----------|
| | 25年度 | 26年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 33年度 | 34年度 | 目標値(34年度) |
| 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合 | | | | | | | | |
| a | SGH対象生徒: | | % | % | % | % | % | 85% |
| | SGH対象生徒以外: | | 65% | 65% | % | % | % | % |
| 目標設定の考え方: 使命感を育む教育を行うことにより、創価大学(別学校法人)をはじめとするSGUへの進学希望者が増加すると思われる。(％はその年度の卒業生に対する割合) | | | | | | | | |
| 海外大学へ進学する生徒の人数 | | | | | | | | |
| b | SGH対象生徒: | | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 30人 |
| | SGH対象生徒以外: | | 11人 | 11人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 目標設定の考え方: 現在も多くの生徒が海外大学への進学を志している。さらに英語力が高まり、問題意識が明確になれば、アメリカ創価大学を含む海外大学への進学希望は増加すると考えられる。(人数はその年度の卒業生に対して) | | | | | | | | |
| SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合 | | | | | | | | |
| c | SGH対象生徒: | | % | % | % | % | % | 90% |
| | SGH対象生徒以外: | | - | - | % | % | % | % |
| 目標設定の考え方: SGH教育を行うことにより自らの問題意識が触発され、その結果、自分の専攻に対してよりグローバルな視点から具体的な進路を考えるようになる。(卒業時のアンケートなどにより明らかにしていく) | | | | | | | | |
| 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数 | | | | | | | | |
| d | SGH対象生徒: | | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 330人 |
| | SGH対象生徒以外: | | - | - | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 目標設定の考え方: 本校生徒が多く進学する創価大学は、SGUとして海外留学に力を入れており、これを利用して卒業生の多くが海外留学・研修を経験している。SGH教育を行うことにより、他大学も含め大学入学後、積極的に海外への留学・研修に参加する生徒が増加すると考えられる。(人数は、1学年の総数のうち、大学在学中に海外留学・研修に行く人数) | | | | | | | | |

| 2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット) | | | | | | | | |
|---------------------------------------|---|------|------|------|------|------|------|-----------|
| | 25年度 | 26年度 | 27年度 | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 目標値(31年度) |
| a | 課題研究に関する国外の研修参加者数 | | | | | | | 100人 |
| | 0人 | 0人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: LCの開設により、より深い研究をするために海外での研修が必須となる。またGRITにおいても希望者による海外フィールドワークを予定している。参加する人数は、全校生徒の約1割を目指す。 | | | | | | | |
| b | 課題研究に関する国内の研修参加者数 | | | | | | | 820人 |
| | 0人 | 15人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: 現在、当該学年の全員が参加して実施している創価大学研修(2年次)、国内研修旅行(3年次)を、課題研究とリンクさせ、事前学習を行い、フィールドワークを含めた研修の機会とする。またGRITの希望者や、LCメンバーによる国内フィールドワークも実施していくことで、全校生徒ののべ8割の参加者数を目指す。 | | | | | | | |
| c | 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数 | | | | | | | 10校 |
| | 0校 | 3校 | 校 | 校 | 校 | 校 | 校 | |
| | 目標設定の考え方: SGHAとなり、アメリカ創価大学だけでなく、オタゴ大学などとも連携を行っている。さらに、ティンブーンP12校や創価大学の提携先であるマレーシアの大学など、多くの海外校と連携することにより、幅広い価値観を学ぶことができるように着実に環境整備を進めていく。 | | | | | | | |
| d | 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数) | | | | | | | 320人 |
| | 0人 | 10人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: 生徒の探究活動をより充実させるため、TAとして大学院生に来てもらうことにより、より深い取り組みができるようにする。また、大学教員のサテライト授業、出張授業も行うことにより、多くの回数が想定される。 | | | | | | | |
| e | 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数) | | | | | | | 150人 |
| | 0人 | 5人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: 探究活動を広げるため、UNDPなどの国際機関と連携した授業・研修を実施する。またフィールドワークで国内外の国際機関を訪問する。今後、提携先となる企業を更に開拓し、出張授業などの取り組みを増やす。 | | | | | | | |
| f | グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数 | | | | | | | 820人 |
| | 0人 | 10人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: SGHの取り組みで身につけた知識をより深めるため、国内外の大会に積極的に参加させていく。全校生徒の8割を目指す。 | | | | | | | |
| g | 帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。) | | | | | | | 14人 |
| | 9人 | 9人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | |
| | 目標設定の考え方: 現状も海外の日本人学校や帰国生を入試で受け入れている。SGHへの採択によって多くの受験生からの応募が想定されるため、受け入れ枠を拡大する。(人数は、学校に在籍する全生徒数) | | | | | | | |
| h | 先進校としての研究発表回数 | | | | | | | 3回 |
| | 0回 | 0回 | 回 | 回 | 回 | 回 | 回 | |
| | 目標設定の考え方: 研究成果については積極的に对外発表を行う。また他校への普及活動にも力を入れる。 | | | | | | | |
| i | 外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない | | | | | | | ○ |
| | △ | △ | | | | | | |
| | 目標設定の考え方: 現状の英語版ホームページをさらに詳しく、細かく更新し、学んだ内容を広く世界へ発信する。また他の言語についても準備が整い次第、発信を始める。 | | | | | | | |
| j | 探究型授業を取り入れる科目数 | | | | | | | 100% |
| | | 50% | % | % | % | % | % | |
| | 目標設定の考え方: 各科目においても、探究型の授業が取り入れられるよう研究・工夫を行い、年間を通して生徒の知的好奇心を触発していきたい。また提携大学の協力の下、教員対象の研修もを行い、年間計画の中で探究型学習に取り組む科目数が100%となるよう目指す。 | | | | | | | |
| k | 英語を利用した授業ができる教員数の増加(英語科教員以外) | | | | | | | 30% |
| | | 10% | % | % | % | % | % | |
| | 目標設定の考え方: 教員対象の研修などを行い、まずは教員自身の英語力を向上させグローバル化に対応していきたい。英語をキーワードとして使える授業、英語の論文を使って説明する授業なども増やしていく。 | | | | | | | |

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

| | 25年度 | 26年度 | 27年度 | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 全校生徒数(人) | 1,071 | 1,075 | 1,071 | 1,068 | 1,063 | 1,056 | 1,056 |
| SGH対象生徒数 | | | 1,071 | 1,068 | 1,063 | 1,056 | 1,056 |
| SGH対象外生徒数 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |